

英国ケンブリッジ州 ウィリンガム教区家系図群

高橋基泰

はじめに

本稿は、英国ケンブリッジ州ウィリンガム Willingham 教区における村落家族の家系図群を、目下進行中の日英村落対比研究のための資料として提示するものである。

家系図の利用に関しては以前別稿（拙稿「近代英国社会における家系図」『歴史学研究』743号，2000年。）で簡単な研究史をたどった。そのときにも最初にふれたのだが、近年の英国における古文書館の活況はきわめて目立った現象であるといえそうである。アマチュア研究者が、自らのあるいはごく近い関係の人々のルーツを家族史というかたちで探訪する姿をみるのは、地方文書館のみならず中央の機関である Public Record Office (London Kew) においてもごくありきたりのことである。いや、この PRO が先導してこうした歴史探訪の普及を促進させているのであろう。先日訪問した際にその売店をのぞいてみると、10年ほど前であればおそらく専門家がいろいろ経験を積んだ上でようやく獲得しえた情報が、ごく気軽に簡略なパンフレットの大群として誰にでも購入できるようになっていたのである。なかでも専門家にも好適な史料ガイドブックとして定評のある Federation of Family History Societies 発行の Guides for Genealogists, Family and Local Historians シリーズは、J. Gibson らの尽力によって驚くほど広範に指南書を生み出している。これは他方、専門家・アマチュア

の垣根をこえて幅広い需要があることを物語っている。

さらに昨年、筆者が英国に出張した折り、*Sunday Times Magazine* (*Times* 紙の日曜版付録雑誌)の広告に家系図作成ソフト・キット Generations Family Tree Version 8.0 software (Sierra Home 社)の広告が出ているのに目をとめた。データ・ベースを基礎に家系図を作成するための手段・情報をもれなく収録した CD-ROM の 20 枚セットが、さして高価とも思われぬ価格(2001 年 9 月で £50, 当時 ¥1 が 180 円程度であった)で、イギリス国民の多数の目にふれる *Sunday Times Magazine* にごく気軽に広告されているのであった。これは、日本の研究者がたぶん 5 年前でも想像できなかつた状況である。しかもこの Generations Family Tree Version 8.0 はインターネット上に WWW 形式の家系図データベースと直接リンクして使うようになっており、きわめて極端な想像をすると英国人のだれもが家系図を作成し、ネット上の家系図データベース拡張に貢献するのである。これにコモンウェルス諸国、合衆国その他英語圏を加えただけでも数年前にはまったく思いもよらなかつた家族史研究の状況が展開することにもなるだろう。

もっとも、家族史研究が個々に進められていったとしても、それらの相互のつながりが、村落・教区・都市といった時代時代で実態をもったまとまりのなかでとらえるためには、まだ一層の工夫と方法の発展がいるように思う。筆者はそのため、日英村落対比研究というかたちで、家族のあり方をより広い社会に位置づけをもつ村落の歴史の中に措定して探求するものである。比較といわず対比というのは日英の村落の相違よりはむしろ類似を探っていくという姿勢をとるからである。また、年代設定・環境条件・歴史的背景が異なるため、直接比較することは到底望めそうにないからでもある。しかし、本稿でとりあげような家系図の態様上の比較であれば必ずしも無理でないようにも思えるのであえて試みる次第である。本稿では、分量の関係から英国の事例のみ資料としてまとめ、次の稿で日本の事例を比較しやすい形で分類し提示するつもりである。

1 研究対象・方法

本稿はそれゆえ英国の事例をあつかう。対象としてケンブリッジ州北西部の沼沢地縁り fen-edged 地帯に位置する教区，ウィリングムの主要家系を扱う。同教区は，筆者の取り組む日英村落対比研究において英国側の主たる対象地である¹⁾。

ここで用いる手段は，上述の家系図作成データ・ベースソフト Generations Family Tree Version 8.0 である。このソフトはコンピュータにさほど習熟していなくてもごく容易に使えるように設計されている。基本単位は夫婦であり，その子供を加えてできる系統図を1枚のシートにしている。その発想は，やはり夫婦およびその子供といういわゆる核家族を基本単位とする，ケンブリッジ・グループの教区登録簿 parish registers による家族復元票と通底するところである。また，教区登録簿がここでも主たる情報源である。

2 家系図の分類：英国 ケンブリッジ州ウィリングム教区の事例

整理の仕方は家系図のスタイルと併せてもいろいろありうるが，ここでは世代継承という観点から分類していこうと思う。

筆者は以前ウィリングムの世代継承に関して，2通りの接近を試みた。1つは，教区登録簿を基にした家族復元票を用いて血統が同一教区でどこまで続いたのかたどる試みである。これについては，16世紀後半の夫婦400余組のうち7割は3世代目をウィリングムに残さず，8世代目まで残しえたのが最長という結果をえた。同一教区内での血統による継承のむずかしさを示唆するものである²⁾。もう1つの試みは，200年間—概ね8世代—にわたってのウィリングムでの姓の転換・継続性の度合いを個々の世帯主を単位に調べていくものであった³⁾。

- 1) この教区についての研究は多い。代表的著作として，M. Spufford, *Contrasting Communities* (Cambridge, 1974) がある。研究史と概観については，拙著『村の相伝・近代英国編—親族構造・相続慣行・世代継承—』刀水書房1999年を参照されたい。
- 2) 拙稿「ケンブリッジ州ウィリングム教区における世代継承と人口移動：1510-1730年」『松平記念経済・文化研究所紀要』13号 1995年 89-90頁。また，拙著『村の相伝・近代英国編』172-4頁。
- 3) 拙稿「ケンブリッジ州ウィリングム教区における世代継承と人口移動：1510-1730年」88-89頁。また，拙著『村の相伝・近代英国編』171-2, 210-1頁。

1524－5年の大特別税の時期に最小限43の姓を記録したものが、1720年代の耕地調査記録には84姓が記録される。84姓のうち、13姓のみが1524－5年にも記録され、その13姓中10姓が、調査記録の全てに顔を出している。個人数で数えると姓の数の場合より値が高く、1つの姓を共有する者が複数いることになり、親族間での結びつきが強さを示すという内容であった。

先に記したようにこのソフトウェアの基本設計は家族復元票と相通ずるものであるから、前者の結果にそって整理すると分類も容易であろう。

家族復元票を用いての試みは1559年から1599年までの夫婦からの系統に限定したため、紙面の都合もあるが、ここでもそれに対応させる。4分の3は孫の代で少なくともこの教区では記録がとだえている。ここではその残余の事例をもっぱら扱うものである。それは、もうひとつの試みでも200年間記録に多く現れる家系と相当重なるのである。このことはむしろ当然かもしれないが、土地保有の大きさ・裕福さ、あるいは村落内で社会的に上位にあることが必ずしも絶対でもないことを示唆する内容である点、注意をうながしたい。また、家族・親族の構成員の多さが絶対でもないようなのである。

【第3世代まで】

以下提示する家系図は、左端が初代で右にいくほど世代を重ねる。

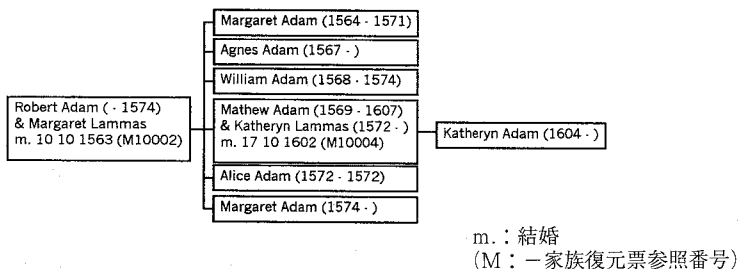
第3世代まで存続する系統では、途中他家系が合流する場合も含むが、姓も存続する。しかし次からの第4世代以上のグループを観察すると、ウィリಂಗム教区に限ってみると血統と姓双方での存続はこの第3世代が分岐点となるようである。

1 ロバート・アダム（-1574）& マーガレット・ラマス（1563年結婚）の系統
Descendants of Robert Adam & Margaret Lammas

3 / 3 （3代中3代男系が続くことを意味する。以下同じ）

炉税期に裕福なものを出すのが、1718年・1720年代の土地調査記録の時点では消失。

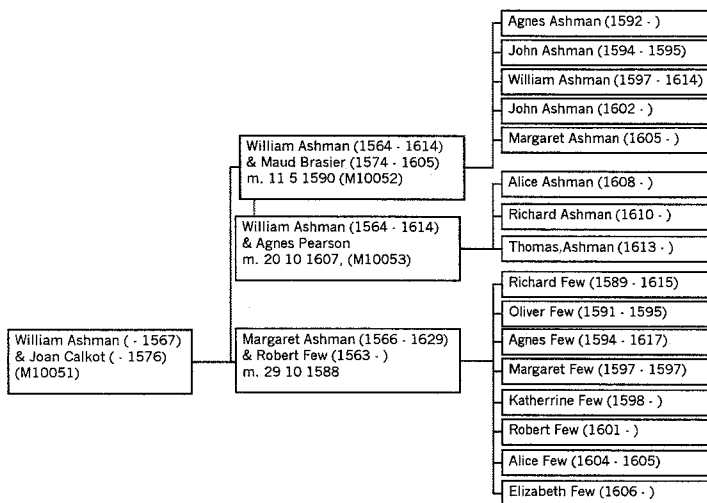
英国ケンブリッジ州ウィリಂಗム教区家系図群



2 ウィリアム・アッシュマン (-1567) & ジョアン・カウコット (-1576) の系統

Descendants of William Ashman & Joan Calkot

3 / 3 (2代からヒュー家も入る)

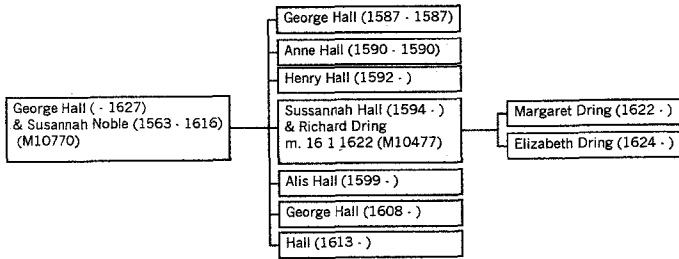


3 ジョージ・ホール (-1627) & スザンナ・ノーブル (1563-1616) の系統

Descendants of George Hall & Susannah Noble

2 / 3

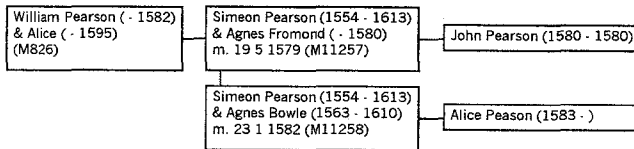
ノーブル家と合流。



4 ウィリアム・ピアソン (ー1582) & アリス (ー1595) の系統

Descendants of William Pearson & Alice

3 / 3

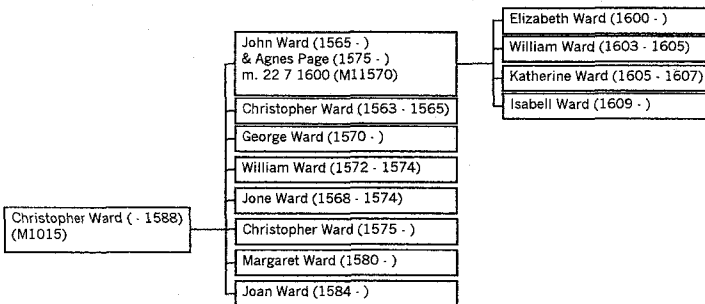


遺言書ではジェントルマンのピアソンもあるのだが、ここではさほどでもない。

5 クリストファ・ワード (ー1588) & 某の系統

Descendants of Christopher Ward & unknown

3 / 3



【第4世代まで】

事例の数においては第3世代までのグループよりこちらの方が多くはありますが、しかし血統と姓との併存という点では必ずしも成立しなくなるのである。すなわち、女系による継承の割合がここから目立つようになるのである。

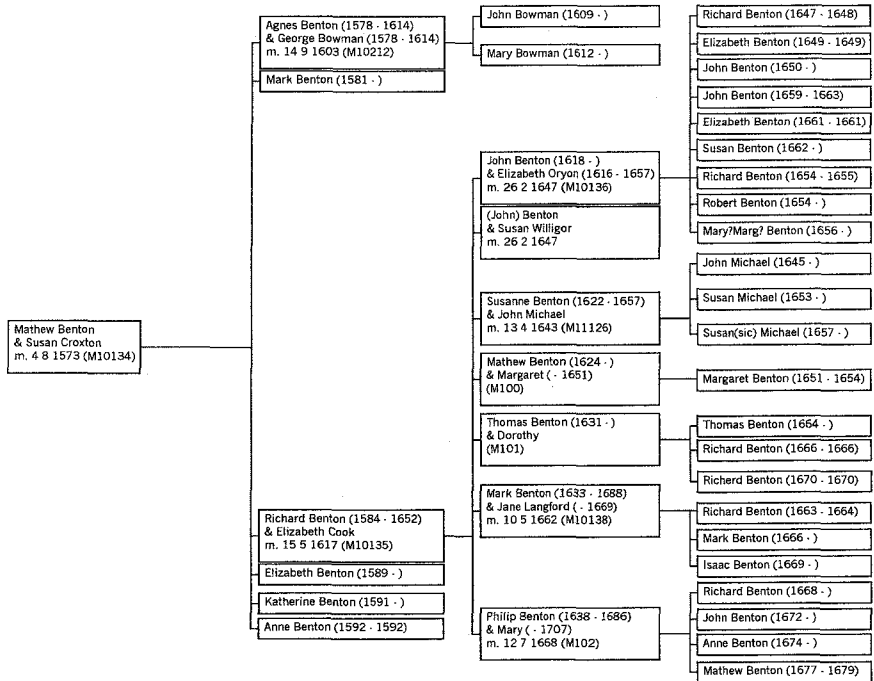
当事者らが相続あるいは家系・血統の存続に関して意をどれほど用いるか、個々の事例をより立ち入って調べる必要があるだろう。

1 マシュー・ベントン&スーザン・クロックストン (1573年結婚) の系統

Descendants of Mathew Benton & Susan Croxton

4 / 4

1575年土地調査記録から登場。炉税記録時点で人数を増やし、かつ有力な者が登場、しかし18世紀には零細保有者のみに。

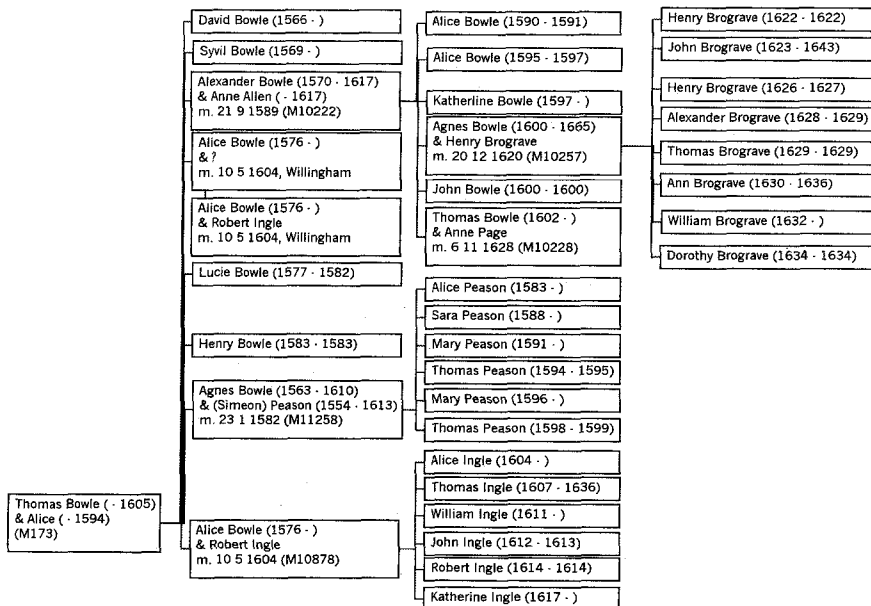


2 トマス・ボウル (-1605) & アリス (-1594) の系統

Descendants of Thomas Bowle & Alice

3 / 4 (3代からのプログレイヴ家で4代目まで)

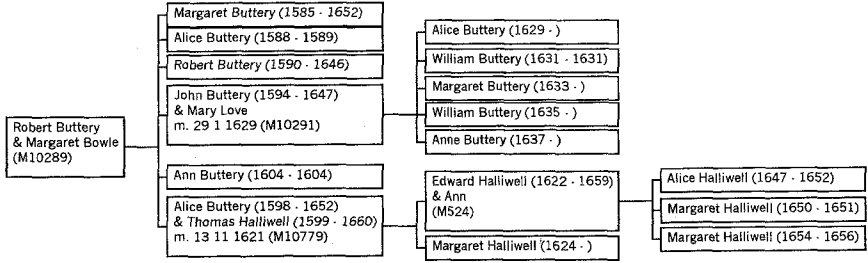
この後でも、5, 6, 8世代までの系統で登場するのがこのボウル家である。ボウル家に関しては拙著で遺言書を通して水運・漁業の系統と繊維・織物業者の系統と2流あるのではないかと推論した。これはそのうち漁師の系統に属する。途中、2世代・3世代でピアソン家が入っているのだが、遺言書ではこの時期漁場・船着き場に関する保有権を保持しているため、ボウル家と縁をもつのもさほど不思議ではないように思われる。



3 ロバート・バタリイ&マーガレット・ボウルの系統

Descendants of Robert Buttery & Margaret Bowle

3 / 4 (2代からのハリウェル家で4代目まで)

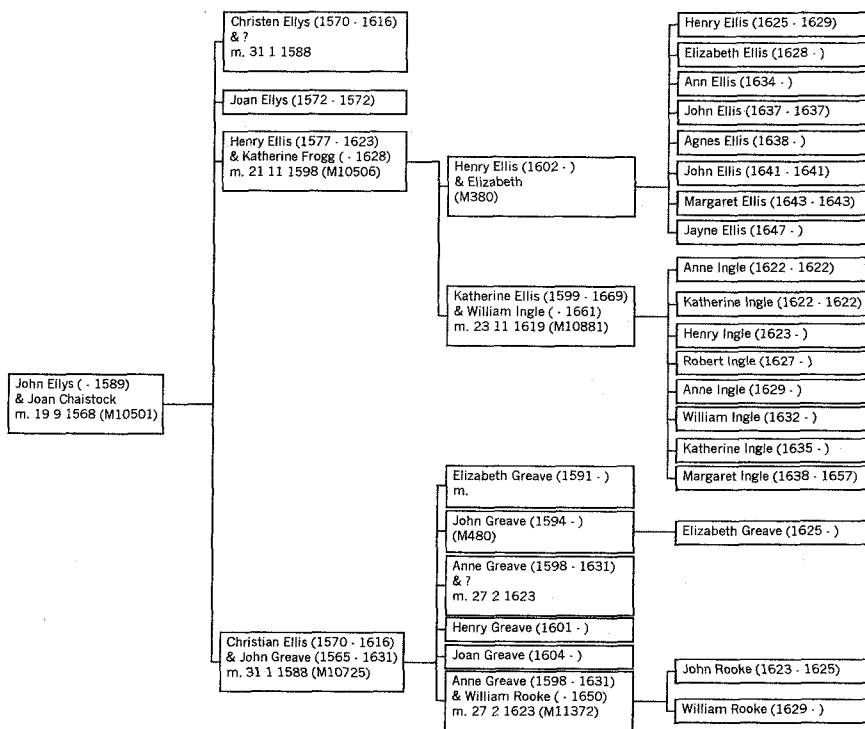


4 ジョン・エリス (-1589) & ジョアン・チェイストック (1568年結婚) の系統

Descendants of John Ellis & Joan Chaistock

4 / 4 (2代目にグリーヴ家, 3代目にイングル家も入る)

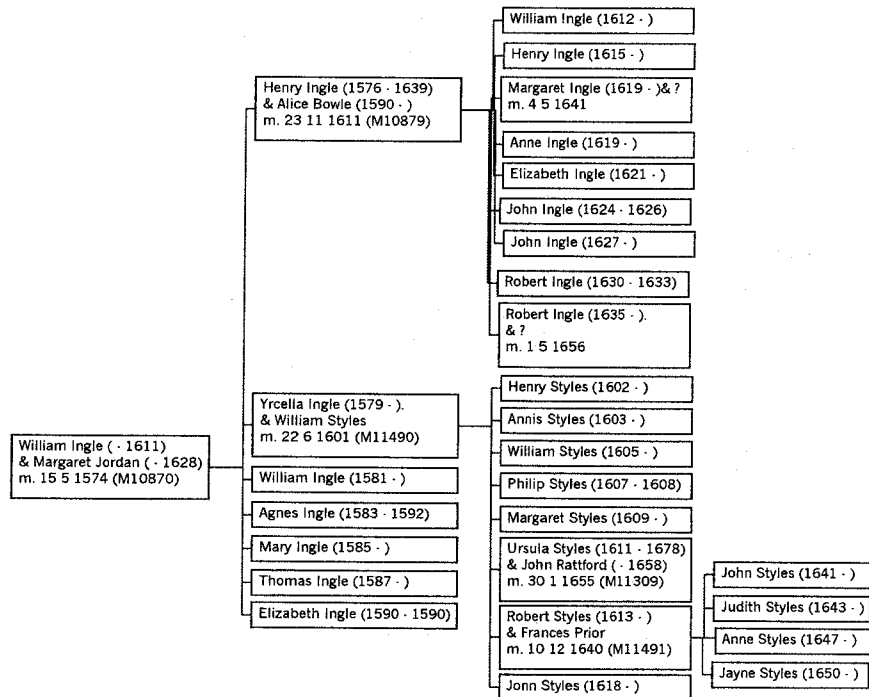
中堅層として当初から。しかし炉税記録時点で消失。1718年土地調査記録で裕福層として再登場。



5 ウィリアム・イングル (-1611) & マーガレット・ジョーダン (-1628)
(1574年結婚) の系統

Descendants of William Ingle & Margaret Jordan

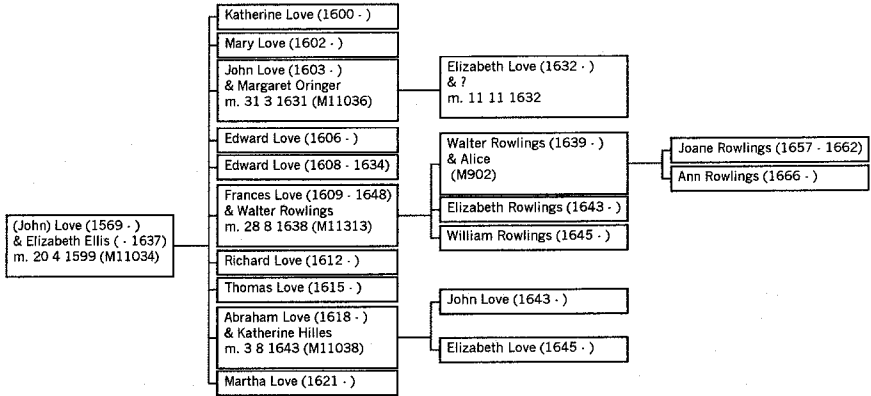
4 / 4



6 ジョン・ラヴ (1569-) & エリザベス・エリス (-1637) (1599年結婚) の系統

Descendants of John Love & Elizabeth Ellis

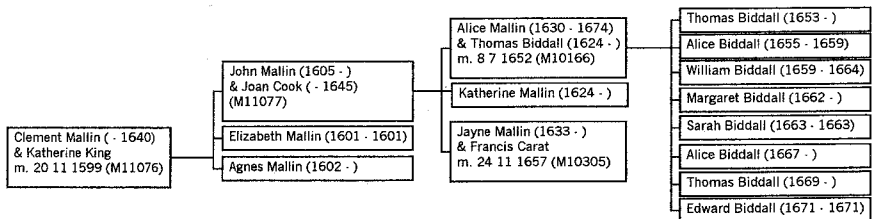
3 / 4 (3代からのロウリング家で4代目まで)



7 クレメント・マリン (-1640) & キャサリン・キング (1599年結婚) の系統

Descendants of Clement Mallin & Katherine King

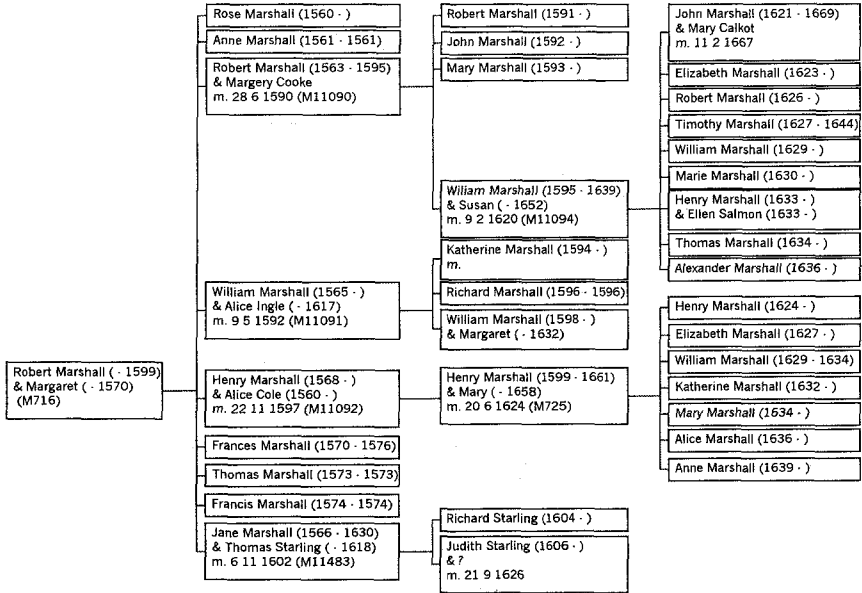
3 / 4 (3代からのビダル家で4代目まで)



8 ロバート・マーシャル (-1599) & マーガレット (-1570) の系統

Descendants of Robert Marshall & Margaret

4 / 4 (2代目にスターリング家も入る)



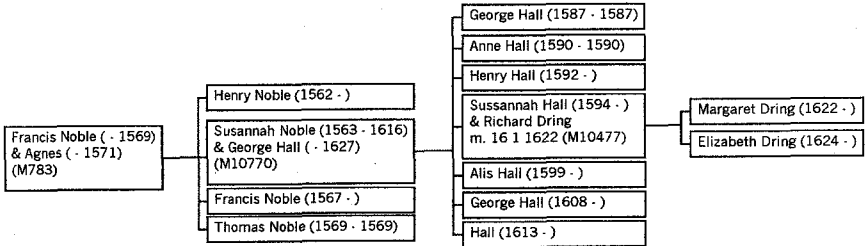
9 フランシス・ノーブル (-1569) & アグネス (-1571) の系統

Descendants of Francis Noble & Agnes

2 / 4

ホール家と合流。

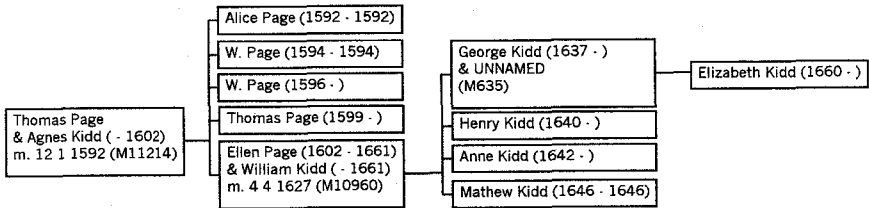
1575年土地調査記録から登場。しかし炉税記録時点で消失。



10 トマス・ページ (-1599) & アグネス・キッド (-1602) (1592年結婚) の系統

Descendants of Thomas Page & Agnes Kidd

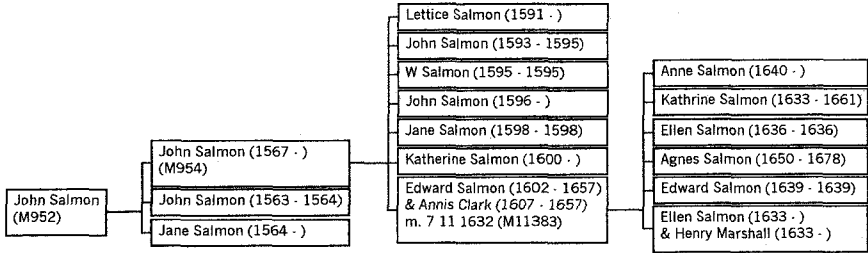
2 / 4 (2代からのキッド家で4代目まで)



11 ジョン・サモン&某の系統

Descendants of John Salmon & unknown

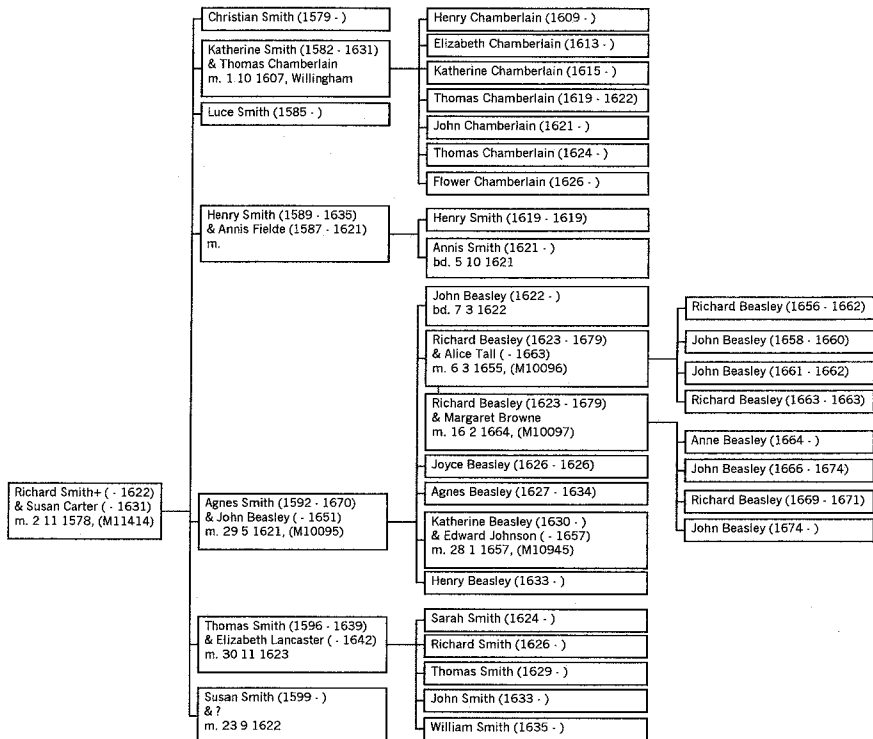
4 / 4



12 リチャード・スミス (-1622) & スーザン・カーター (-1631) (1578年結婚) の系統

Descendants of Ricahrd Smith & Susan Carter

3 / 4 (3代からのピースリー家で4代目まで)

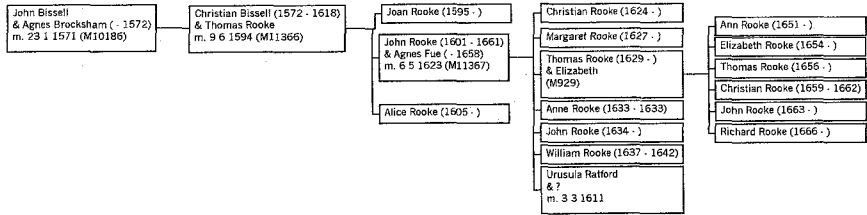


【第5世代まで】

1 ジョン・ビッセル&アグネス・ブロックシャム (-1572) (1571年結婚)の系統

Descendants of John Bissell & Agnes Brocksham

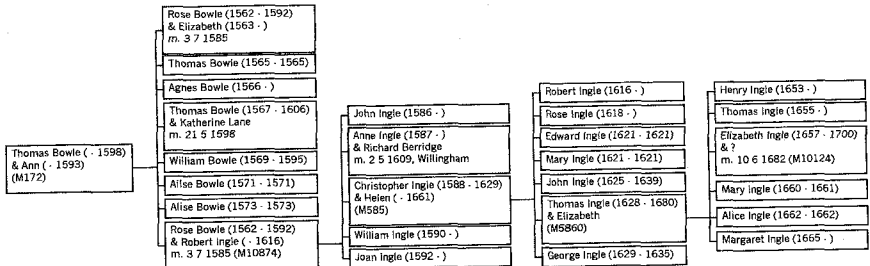
2 / 5 (2代からのルック家で5代目まで)



2 トマス・ボウル (-1598) & アン (-1593) の系統

Descendants of Thomas Bowle & Ann

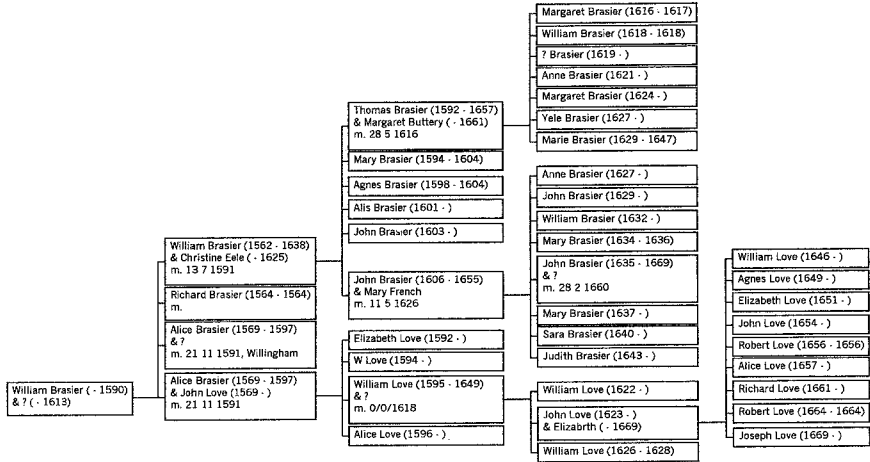
2 / 5 (2代からのイングル家で5代目まで)



3 ウィリアム・ブレイザー & 某の系統

Descendants of William Brasier & unknown

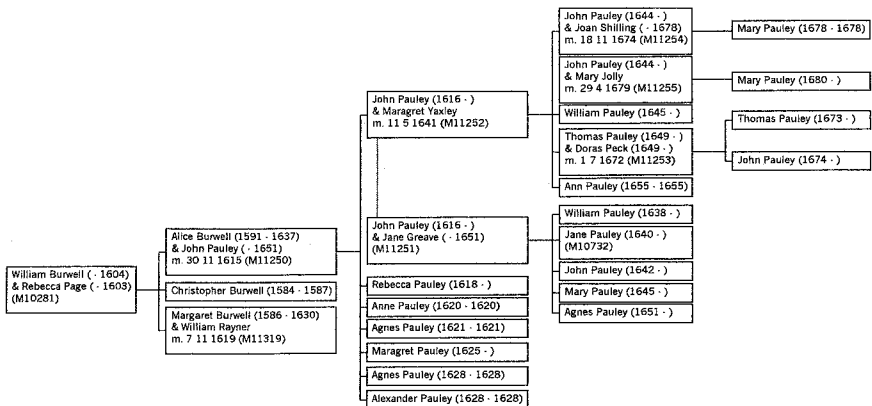
4 / 5 (2代からのラヴ家で5代目まで)



4 ウィリアム・バーウェル (-1604) & レベッカ・ペイジ (-1603) の系統

Descendants of William Burwell & Rebecca Page

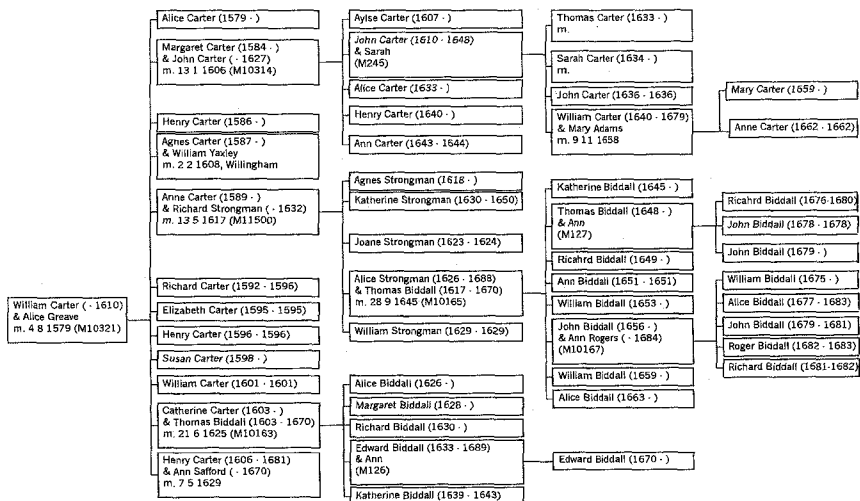
2 / 5 (2代からのパウリー家で5代目まで)



5 ウィリアム・カーター (-1610) & アリス・グリーヴ (グレイヴス) (1579年結婚) の系統

Descendants of William Carter & Alice Greave(Graves)

5 / 5 (3代からビダル家も入る)

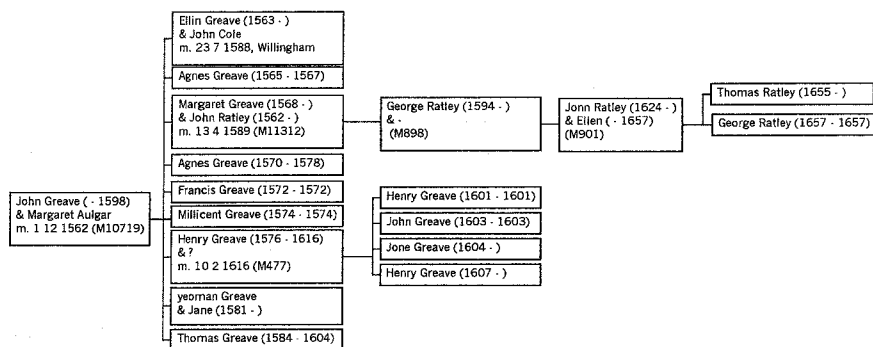


6 ジョン・グリーヴ (グレイヴス) (-1598) & マーガレット・オウ (ル) ガー (1562 年結婚) の系統

Descendants of John Greave(Graves) & Margaret Aulgar

3 / 5 (2代でラトリイ家と合流)

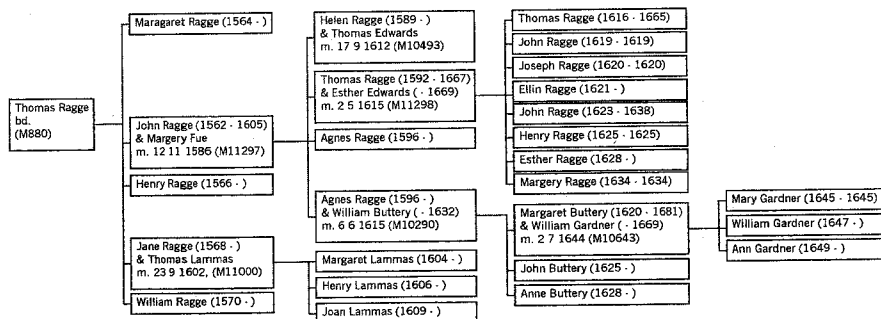
同様の合流の事例が、後述の第8世代までのグループでヒュー家およびボウル家において見出せる。



7 トマス・ラッグ&某の系統

Descendants of Thomas Ragge & unknown

2 / 5 (3代からのバタリイ家で4代目まで, 4代からのガーデナー家で5代目まで)

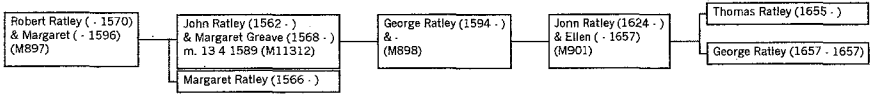


英国ケンブリッジ州ウィリンガム教区家系図群

8 ロバート・ラトリイ (-1570) & マーガレット (-1596) の系統

Descendants of Robert Ratley & Margaret

5 / 5



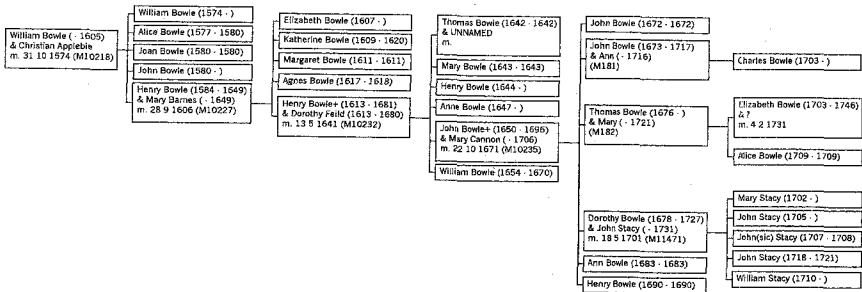
【第6世代まで】

1 ウィリアム・ボウル (-1605) & クリスティアン・アップルビー (1574年結婚) の系統

Descendants of William Bowle & Christian Applebie

6 / 6

6世代までとなると事例はきわめて少なくなる。次の例とこの事例のみであるが、6世代まで男系で存続しているが、先にふれたように同一姓での2系統の併存が作用しただろうか。

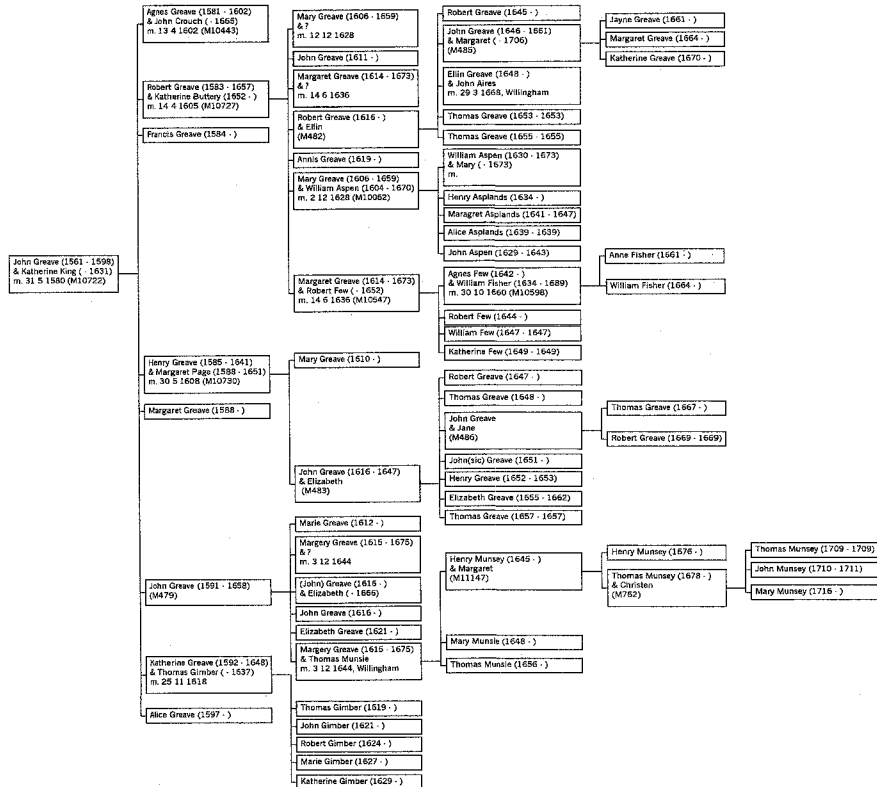


高橋基泰

2 ジョン・グリーヴ (グレイヴス) フリーホルダー (1561-1598) & キャサリン・キング (1580年結婚) の系統

Descendants of John Greave(Graves)'Freeholder' & Katherine King

5 / 6 (3代からのムンジー家で6代まで)



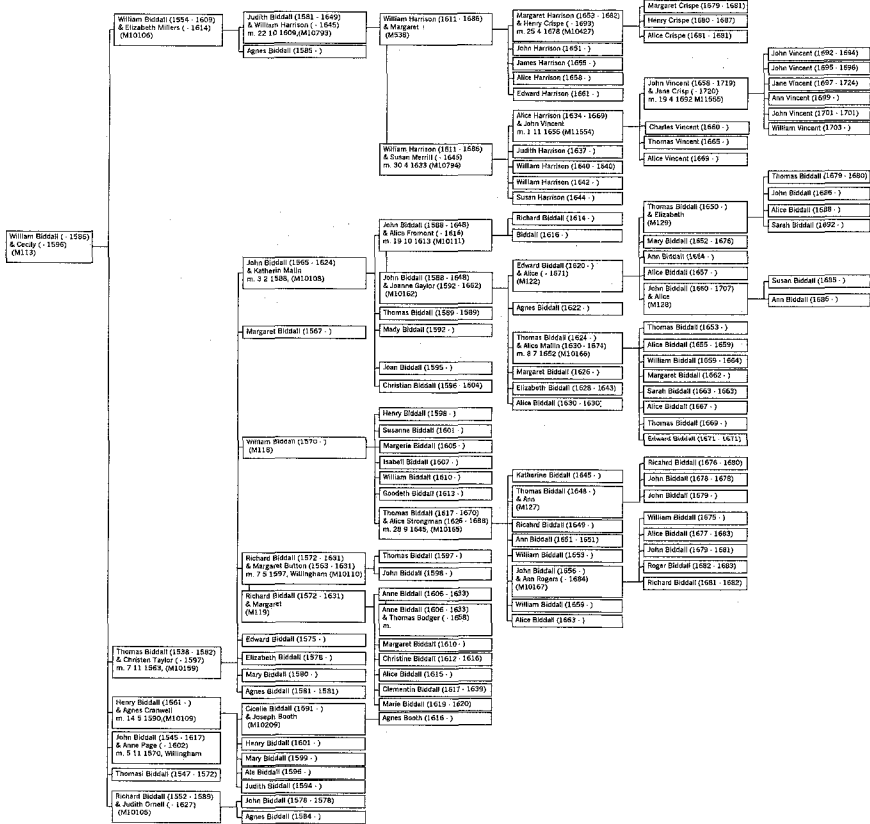
英国ケンブリッジ州ウィリントン教区家系図群

【第7世代まで】

1 ウィリアム・ビダル (-1586) & セシリエ (-1596) の系統⁴⁾

Descendants of William Biddall & Cecily

7 / 7

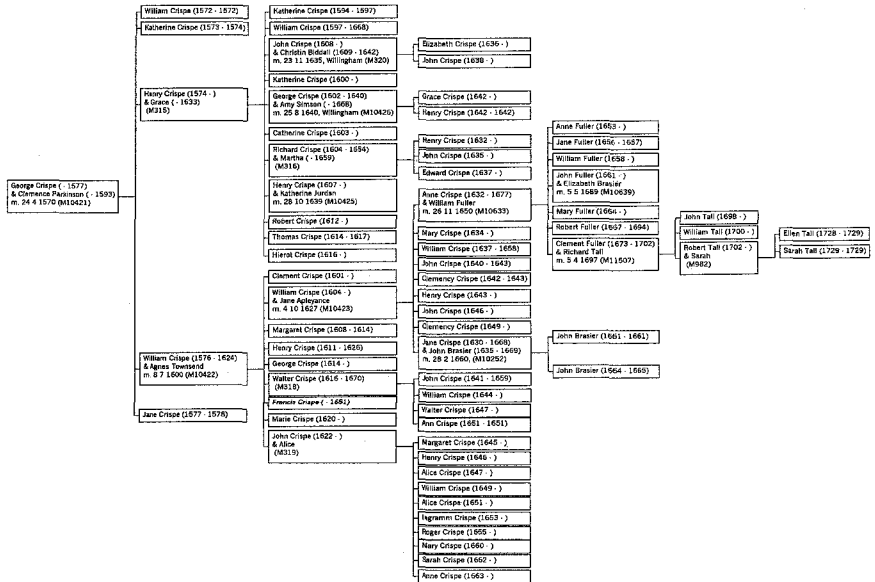


4) ビダル家に関しては M. Spufford, *Contrasting Communities*, pp. 140-1 また、拙稿「対比研究への導入：日英村落における親族構造と社会・経済組織」『愛媛経済論集』第19巻第3号 2000年 43頁でも手描きの家系図を用いて分析している。

2 ジョージ・クリस्प(-1577) & クレメンズ・パーキンソン(-1593) (1570年結婚) の系統

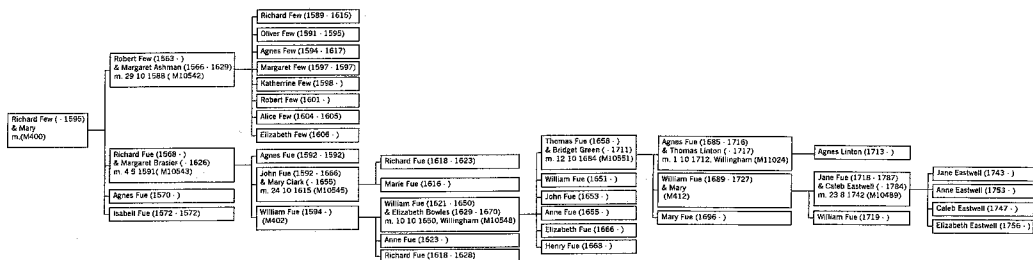
Descendants of George Crispes & Clemence Parkinson

4 / 7 (4代からのフラー家で5代目まで, 5代からのツール家で7代目まで)



ウィリಂಗム教区において8世代までその子孫の記録を教区登録簿でたどれるのは、このボウルおよびヒュー家の系統のみである。そして確率という点ではなんら驚くまでもないことなのかもしれないが(筆者は驚いている)、これら2系統は各々4代目で合流し、5代目からは同一のヒュー家であり、7代目でイーストウェル家に転ずるのである。もっともその合同の家系図は意外に大きくない。

ヒュー家は7世代まで同一姓で続いた点でもまた希少な存在であるといえよう⁶⁾。このヒュー(Few「ほとんど、ない」という意味にもとれる)家という、名前にいささかの諧謔を覚える家系がビダル家などよりごく少ない延べ人数でこれだけ継続したのである。もっとも継承ということに関してこの家系の当事者たちがどれほど意識的であったのかは今の段階では推断しがたい⁷⁾。ただ、詳しくは本稿を足がかりにこれから調べていくのであるが、これまで筆者が土地調査記録・地図・遺言書などを通して接してきたヒュー家像は、どちらかという村の有力層としては傍流であり、村外れなどにも居を構え、村外との交渉も活発で村への移入を助け、また村内でもやはりごく中層に位置するブレイザー家などと婚姻関係を結んでいる。いわば細く長くやっていくタイプである、といえようか。



6) もっとも、発音がヒュー家と日本語では同じだが、記載の仕方は Few・Phew・Fue と大きく3種類あり、近世日本における名前の記載がやはり発音に文字をあてていったのと相通ずるところである。

3 今後の課題・展望

今回は、あくまで資料としてウィリンガム教区の家系図群をある程度系統立てて提示するにとどまった。親族間の状況、社会的経済的要因のとの関連などについての研究はむしろこれからであるというべきであろう。たとえば、ポウル家やグリーヴ（グレイヴ）家など複数家系を示した場合でもその相互の連関などは教区登録簿―家族復元票からのデータのみではそれ以上はわからないのである。遺言書などの史料を今一度検討する必要がある。

また、本稿で用いた Generations Family Tree Version 8.0 は、時系列形式で個人々の寿命を示すこともできる。しかしながら、それを今回主たる様式として用いた系統図に組み合わせることはできない。さらに、宇宙空間に浮かぶようにして立体的に示すこともできるがそれを用いて何かできるというものでもない。今後は、技術の急速な進歩は確実であるからそうしたことも視野に入れていくけれども、しかし地道に個々の家系図を組み合わせしていく作業を重ねるほかあるまいと思われる。

7) 故D. ジープス氏の談によれば、氏はイングル家とこのヒュー家との双方の子孫とのことであった。この8世代にわたる家系図には途中イングル家も入るのである〔2-3-4代目〕。氏の存命中に尋ねるべきだったのは、教区登録簿の記載がとだえ、国民―センサスの間をつなぐ時期にどのように家系が当教区で継承されたかであった。少なくともイングル―ヒュー―ジープス家の連続の経過を問うべきであった。氏の地方史関係文書はケンブリッジ市民図書館に遺贈され、そこの地方史部門においてジープス・コレクションとして公開されるべく現在整理中である。目下筆者はその公開を待っているところである。

【第3世代まで】

1 ロバート・アダムの系統
Descendants of Robert Adam



2 ウィリアム・アッシュマンの系統
Descendants of William Ashman



3 ジョージ・ホルの系統
Descendants of George Hall



4 ウィリアム・ピアソンの系統
Descendants of William Pearson



5 クリストファ・ワードの系統
Descendants of Christopher Ward

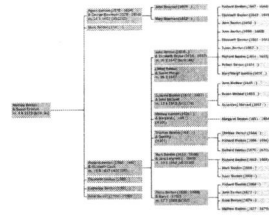


【第4世代まで】

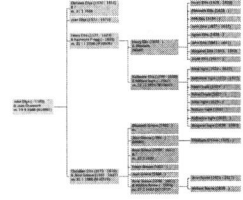
2 トマス・ボウルの系統
Descendants of Thomas Bowle



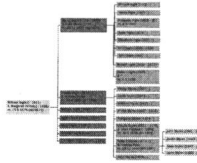
1 マシュー・ベントンの系統
Descendants of Mathew Benton



4 ジョン・エリスの系統
Descendants of John Ellis



5 ウィリアム・インゲルの系統
Descendants of William Ingle



3 ロバート・バタリイの系統
Descendants of Robert Buttery



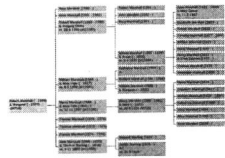
6 ジョン・ラヴの系統
Descendants of John Love



7 クレメント・マリンの系統
Descendants of Clement Mallin



8 ロバート・マーシャルの系統
Descendants of Robert Marshall



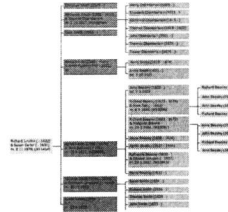
9 フランシス・ノーブルの系統
Descendants of Francis Noble



10 トマス・ページの系統
Descendants of Thomas Page



12 リチャード・スミスの系統
Descendants of Ricahrd Smith

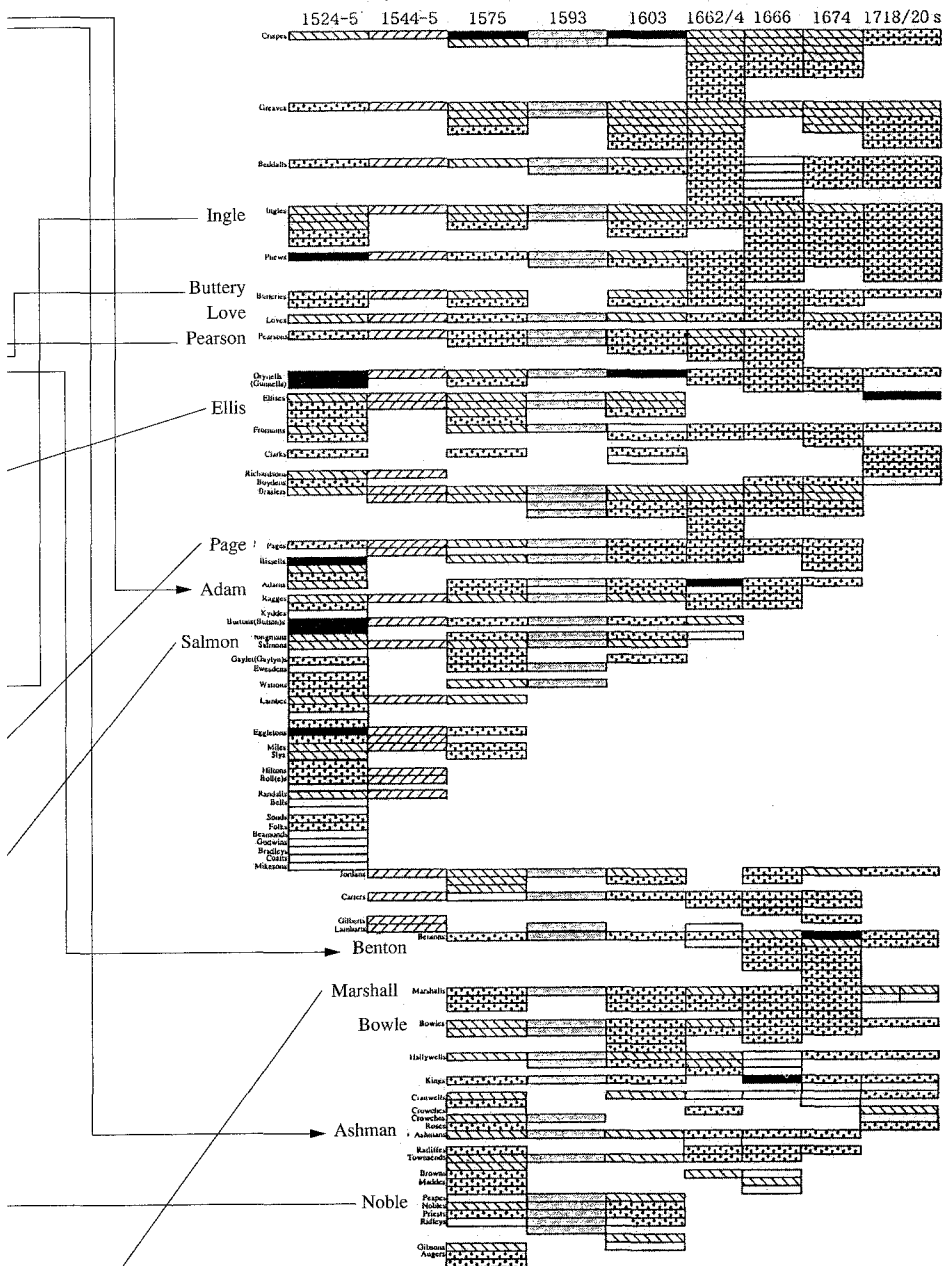


11 ジョン・サモンの系統
Descendants of John Salmon



英国ケンブリッジ州ウィリンガム教区家系図群

ウィリンガムにおける姓の転換 (個人単位) 家名入り



【第5世代まで】

1 ジョン・ビッセルの系統
Descendants of John Bissell



2 トマス・ボウルの系統
Descendants of Thomas Bowle



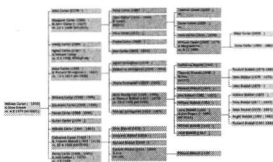
3 ウィリアム・ブレイザーの系統
Descendants of William Brasier



4 ウィリアム・バーウェルの系統
Descendants of William Burwell



5 ウィリアム・カーターの系統
Descendants of William Carter



6 ジョン・グリーヴの系統
Descendants of John Greave



7 トマス・ラッグの系統
Descendants of Thomas Ragge



8 ロバート・ラトリイの系統
Descendants of Robert Ratley



【第6世代まで】

1 ウィリアム・ボウルの系統
Descendants of William Bowle

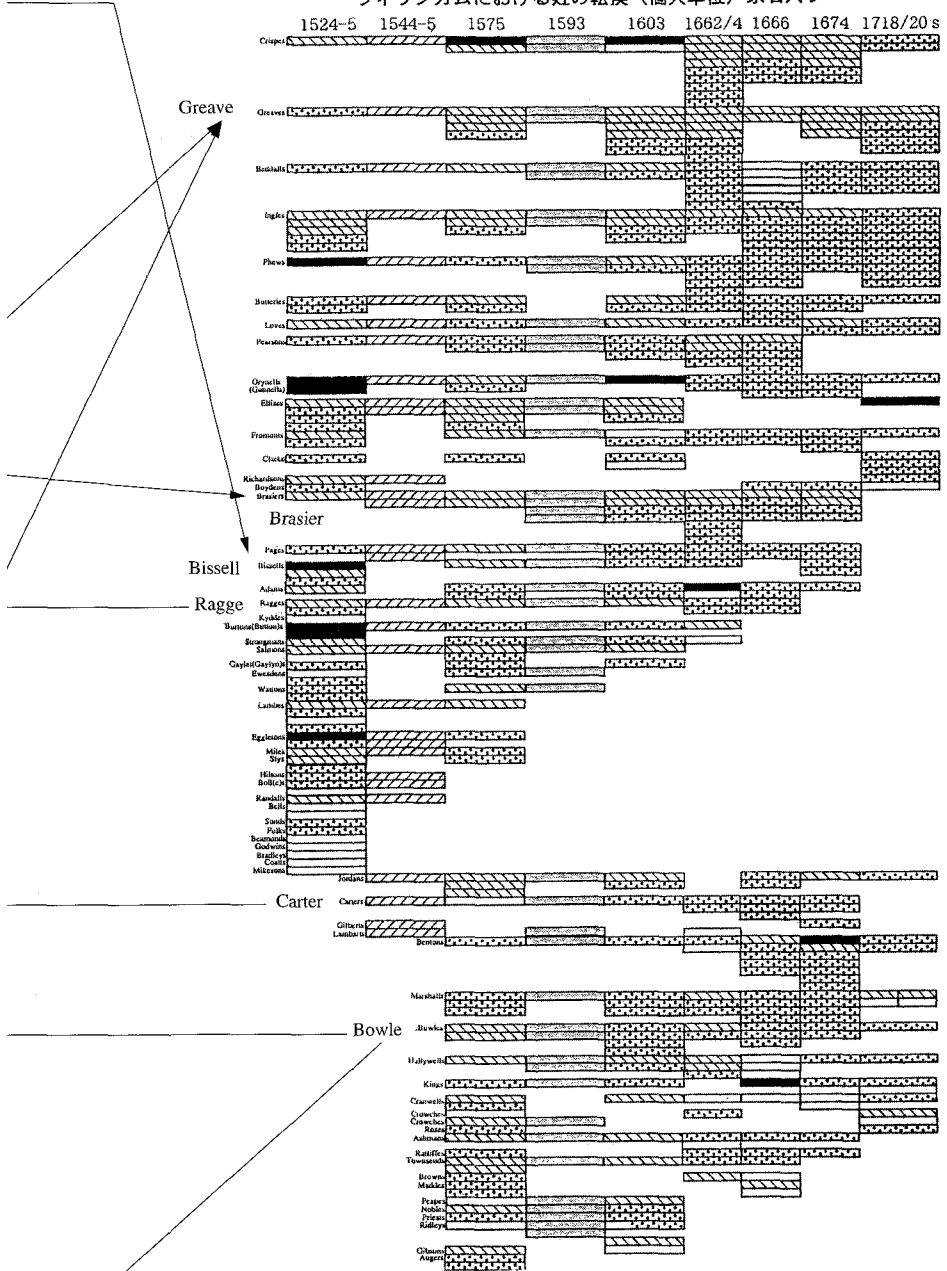


2 ジョン・グリーヴの系統
Descendants of John Greave



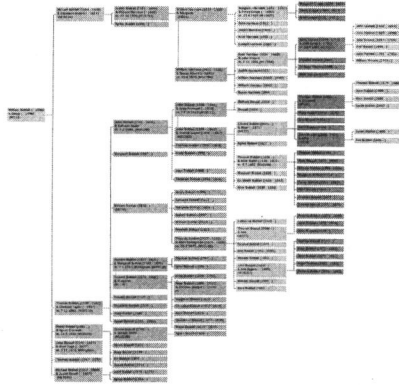
英国ケンブリッジ州ウィリンガム教区家系図群

ウィリンガムにおける姓の転換（個人単位）家名入り



【第7世代まで】

1 ウィリアム・ビダルの系統
Descendants of William Biddall

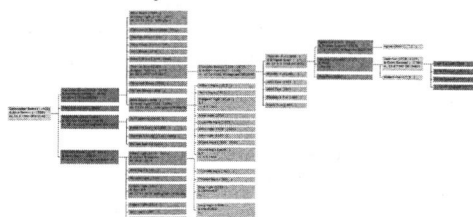


2 ジョージ・クリスピの系統
Descendants of George Crispes



【第8世代まで】

1 クリストファ・ボウルの系統
Descendants of Christopher Bowle

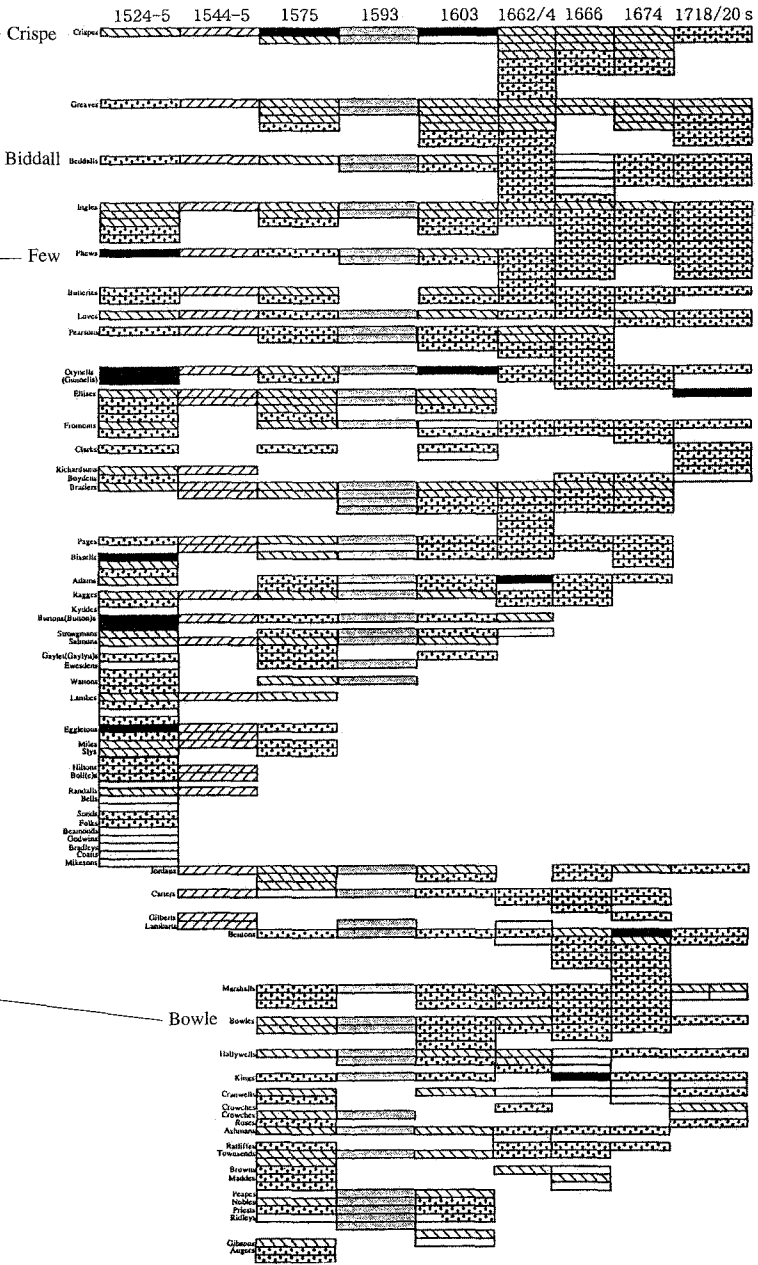


2 リチャード・ヒューの系統
Descendants of Richard Few









英国ケンブリッジ州ウィリンガム教区家系図群

ウィリンガムにおける姓の転換（個人単位）家名入り



凡 例

-  1524-5年 大特別税 10ポンド以上
 1575年 土地調査記録 1ヤードランド以上
 1603年 地図 同
 1662/4年 炉税調査記録 6 炉以上
 1666年 同
 1674年 同
 1718/20年代 土地調査記録 1ヤードランド以上
-  1524-5年 大特別税 5ポンド以上9ポンド+以下
 1575年 土地調査記録 半ヤードランド以上
 1603年 地図 同
 1662/4年 炉税調査記録 3 炉以上5 炉以下
 1666年 同
 1674年 同
 1718/20年代 土地調査記録 半ヤードランド以上
-  1524-5年 大特別税 30シリング以上4ポンド以下
 1575年 土地調査記録 半ヤードランド未満
 1603年 地図 同
 1662/4年 炉税調査記録 2 炉
 1666年 同
 1674年 同
 1718/20年代 土地調査記録 半ヤードランド未満
-  1524-5年 大特別税 30シリング未満
 1575年 土地調査記録 土地無し
 1603年 地図 同
 1662/4年 炉税調査記録 1 炉あるいは課税免除
 1666年 同
 1674年 同
 1718/20年代 土地調査記録 土地無し
-  1544/6年 大特別税
 1593年 村立学校設立寄付

出 典

Public Records Office (P. R. O.), E179/81/126, 130 Subsidy Assessments, 1524, E179/81/142, 156, 159 Subsidy Assessments, 1525, E179/82/185, 200, 206 Subsidy Assessments, 1544/46, E179/84/436 Michaelmas Hearth Tax Returns, 1662, E179/84/437 Micaelmas Hearth Tax Returns, 1664, E179/244/22 Lady Day Hearth Tax Returns, 1666, E179/244/23 Lady Day Hearth Tax

英国ケンブリッジ州ウイリンガム教区家系図群

Returns, 1674 ; Cambridgeshire Record Office (C. R. O.) Li/118 Court Rolls (1547
– 1602), P50/28/54 Nine Sheets of Parish Accounts (1567–1590), P127/28/
10 Map Town Land, R59/14/5/8 (a)–(f) Town Terriers and Field Books.